



広島出身者会の設立を

藤原和範 議員

町長 新たな「ふるさと応援団」の誕生に期待



問 人口減少が進む中、本町出身者や応援いただける方々に「ふるさと応援団」として支援をいただくことは、これからの町づくりにとって重要なことと思う。

現在、大阪を中心とした関西奥出雲会と東京仁多会があるが、隣県である広島県には出身者会が組織されていない。尾道松江線の全線開通も予定され、島根ふるさとフェア等様々なイベントや交流活動も盛んに行われている。また、コメ政策見直しの中にあつて、仁多米の消費地としての期待も持てると思う。

答 是非、広島出身者会の設立を、広島にはきちんとした組織が無く、毎年

1月のふるさとフェアの開催時期に、横田高校・稲穂会の支部総会にあわせて奥出雲交流会を開催したとき、交流を深めている。先般、稲穂会広島・山口県支部の役員の皆様が来町され、出身者会の設立について、町への協力依頼があった。

今後は協議を重ね、新たな「ふるさと応援団」の誕生に期待しているところである。

問 次に必要なのは、個人的なふるさと応援団の充実である。ふるさと出身者よりも、広く全国からの「奥出雲町ファン」づくりも大切であると思う。本町では、10万円以上のふるさと納税寄付者に「ふるさと応援大使」を委嘱し、観光宣伝活動等をいただいているが、他の自治体では、町にゆかりのある人、興味があがり好きで応援したい人などとのつながりを求め「町の応援団」への登録をインターネット等で呼びかけている。

本町においても、出身者会に加え、ふるさと応援

基金のPRのためにも、町の応援団の検討は。

答 個人的な応援団については、既に「ふるさと応援大使」という制度がある。それ以外にも本町にゆかりのある方、あるいは応援をいただける方については、町の顧問等の層書きで、東京や大阪で奥出雲町のPRをお願いしている。

一般の方の応援団については、その管理のこともあり、今のところ組織化までは考えていない。

問 地酒で乾杯条例の制定・支援について。

本町には、数々の特産品があるが、斐伊川の清流と地元産の酒米で造られたこだわりの地酒も町の誇るべき財産である。近年、日本酒の消費が減少傾向にあることから、全国の酒どころでは「地酒による乾杯を推進する条例」を制定し、地産地消を進めるとともに一層のブランド化へ地域を挙げて支援する動きが広がっている。

県下でも優秀な酒どころとして、「地酒で乾杯条例」を制定し、地元消費

例」を制定し、地元消費はもとより、仁多米とともに奥出雲の食文化による地域経済の活性化に結びつけては。

本町での対応と県内の酒米の約4分の3を生産している雲南地域・雲南広域連合での対応呼びかけが考えられる。

答 現在、全国で22の自治体、県内では邑南町と津和野町が乾杯条例を制定している。何よりも、地酒で乾杯できるような機運と地域の皆様の声が高まっていくことが大事であると思う。

なお、雲南広域連合では、条例化に向かって検討が進められている。



島根ふるさとフェア出店（広島にて）